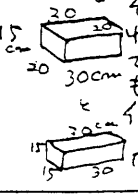


報知 龍屋 新聞

追々!!
陽干しレニング陽の目とみる日
秋の道具展 10/17
10/22

く王川高屋

「鴨川登一」コカニヨ電
大きければいいものでもない
数が多ければ許されるもの
でもない。それでも作りつたり
サイズもここは 30cm
15
の大ききの
レニングと
合わせて五百個。一本半
の粘土が消費された。
その土を掘り出した跡が
本社社屋の直下の横腹
にのこされている。レニング
とされたその辺を地面にこ
「自然ハカイそのもオカシ」
とやっかみ半分に叫んだ
御人もいた。
このレニングをサークルと



描くようにしてニキトル
のと同様に積み、道具展
の人寄せ造物にしよう
く、コニタニである。
あのタカシマ屋にも
二人なことに力を貸
すのだった。いまから
待たれる世紀末の展
示物である。
帰るうとしない受講者たち
モチモチ、龍屋教室

「東京原宿登一」オカニヨ電
去る二月十三日に原宿
の「からだふれつと」教室
で龍屋作り教室が開
かされた。同教室は渡
辺栄三師が主宰する
操体法の教室であり、
治療院であるが、とま
びせへんなこともする。
講話の会と設けたり、
講師を呼んで話して聞く
会と申したりしている。今回
は龍屋作りだった。教室も
は本社社主自らが合意性
を出して指導に当たっ
た。始まりのアイサツもなけ
れば、終りの宣言もない。
社主が用意した材料を

のいたって不親切な教
室だった。二十人ほどの
参加者は夢中になつた。
彼はそれとすみのオカシ
ながめながら毎ビールと
のんでいた。六時から始め
て七時過ぎには完成した
人もいる。早く教室を
えて彼は友人たちと飲め
けに出た。彼が彼の夢
は破れてしまった。定戒の
と手にした出席者がまた
手を動かして龍屋をアレシ
直すのだ。今度はより
大きくなり変化に豊
だ型に変えていった。彼
が初めに口にしたコトが
いけなかった。
「モチモチ合なきはない
からだから自由な型。自
由な大きさにして下す。
参加者の目は輝き、八時

報知龍屋新聞社
千葉県鴨川市代六三三
電話 0476-929292
FAX 0476-929292
東京

創刊ハ
昭和五十年
なにかい
はまりない

「後人転生」
春のうららかな日は
幸せの知らせか。
頬をなぞる風の冷た
さに「まだまだ」
と、春とたこめ。
エンドレスな彷徨にはやり
はあつたはずもない。
欲は欲と呼び寄せ、欲
まくりの日尚やと余儀存
くされる。欲と直面して
とき、この身にビクリと
糸う欲が浮力をかきこ
れるから、自分の日への
ように気付かずにすむ。そ
が、欲に横目と向けたら
おさえる力は頼りになら
ず、身にまかせて身もた
するのだった。溜息する
助走力に不足し、地べた
は、すりぬけて目が暮る。
「この世と何のつながりも
つけれない」と想いをま
食、おのめにくい奇型見
くはない。その奇型を正
な目で奇型としてとら
か、もはや、おはなし(うら)

(心)を過ぎても帰る人が
いない。七時になってま
だ教人が残っていた。三
はほうまご掃き出すよう
にして生徒たちを追い出
した。また秋にやうな
の熱いコーンに社主は
目玉をたらしく下げて
いた。尚、次回誌作り
教室は十月中ころのぼす
詳しく知れた事はがら
ふゆ、まご、デニウ
〇三五一五四七四一〇〇七

木づい

「山武郡・三才村巻」

長野県大須村に住民票
のある百姓シンガー、木づ
・内田のコンサートが
半島で行なわれた。表
市でかゆまりに、山武郡
成東町のテラス地球
座と三才村の自然陸
で開かれた。盛況であ
った。地球座は特にく

の集まりがよく、会場の
床が抜けるほどだった。
(遺物はりっぱだったこ
とは申し添えておく)
頃のながで、いつもなが
ら胸が熱くなるよ。は
カネネシア・フリーウェイ
である。黒潮の波、又
化園と記者は意識エ
サされた。沖繩、西島、
信州、トカラの歌、新三
に住んだ経験のある木づ
には、この潮のいくかは
血肉化したことと
田心。タスマニアの雨林
採に抗く、反核コンサ
で開く木づのコンサート
見、字、て、て、て。

籬屋新聞社
取扱っている本
(仮題)
琉球島の北の端の日常
¥2500 送料310
17年目のトカラ・平島 鳥社
¥2266 送料310
青春彷徨 福音館
¥1700
兼民列島 未未社
¥1400

トカラの地名と民俗 木づ環
上、下巻合わせて ¥3500
トカラの伝承 ¥500
平島有線放送速記録 他
お申込みは当社へ
郵便振替
〒1160 1-11979

鳥(くろ)社刊・トカラ平島再々訪記
稲垣尚友著
「密林のなかの書齋」

発行迫る

東シナ海を舞う
活やくした海商たち。
この多くは琉球王国の人
たちであったが、その中に
トカラの人もあつた。
彼らは首里(王国)に
に居住し、大陸との交易に
たづなうてた。鳥は
戒絶した。この鳥は

そうした視点でトカラを
と、こうしようとして、そのか
この著者がある。東シナ海
とこの文化圏として
とらえようとする試み
は、いくつりの先人がなげ
てきた。琉球人(リキオ)
とは別に、倭人がいた。彼
らは朝鮮半島、大陸
五島、対馬、博多を舞台
にして生活していた。貿易の
は、時に倭寇と呼ばれ、
して沿岸、内陸を世した。

〈注文受付中〉

倭寇は日本人とは限らない。
それにもスペイン人も入っていた。
玉直は中国人だが、五島を拠点
にして、シニの海を自由に往來
していた。琉球王の命をなげ
半島にももむいたこともある。
三千人の配下を持ち、本人は
平戸に寓居し、権を握っていた。
当然、トカラの沖にも彼らは
出没した。著者は平島に永
く住み、沖合にはゆかに浮きか
玉直のジャンク舟を現認しよ
うと試みかけた。十六世紀の
東シナ海の世界である。こ
には「おもも」も出てくる。
本朝時代の半島の生活も伝
わってくる。この書は、どうも
世界への序章である。
いま本の注文も受け付けて
希望ある。おは、同封の振替
用紙で、送料+送料を送
らされたし。発行士、だ
お手元には、長書、かどどく
はず。尚、三冊以上でも
送料は同じ三〇〇円です。
鳥社とライター支拂のため
にも一家に一冊以上をうご

琉球球王の命を求めらる編まれた百語(御歌)集。全三巻をび一六三二年の完成

タスマニアへ

ナオがなびく



〔東京 信濃町発一センターハイライナイ電〕
ブルー・ポイントの
主催の箱庭なふとも
有にビールを飲む会が
かいた。有の味に一株の
母があつたが、その当日は
ダイ盛況 静かな住居
の中の一室で催された会
ごあつたが、岡田メイワ
も多々あつたらう。酔人
たちのガミ音が遠く神
宮の木林にまでとどいたか
その席で、ナオ(ナオトモ)は
口にしてきた。
「十二月に漆かまの兄と
一緒にタスマニアに行き
なせ、漆かまののはわから
ない。十二月になつたのは漆
カオフシーズンだからだ、
ナオ(以下、当人と呼ぶ)が

初めてタスマニアの名を知
つたのは五年半前だ。ある
オーストラリア大陸のト
の砂ぼくに十年住んで
ヒサオが鴨川の本社を
てきたと王だった。木
の住む大蔵村の住人にア
かいるが、彼がつかれて
ヒサオは砂ぼくからタスマ
ニアに物こそ三年が経つた
砂ぼくはアボリジニとい
一緒に暮らして来たが、タ
マニに物つてからはどう
のか聞かなかった。彼は
時、ナオは弾の首を弾地
の雨林の中に座り込んで
いた。ベトナムでもない
にナバー4弾が発射
されてきたのだ。雨林と
なまじりし、そとを回

て、チップ材として輸出す
るためである。曲まな
タスマニアの雨林も、現在
では島の三分と下回って
いる。世界遺産として指
定されているが、実は、
道路が森の中深くへ通じ、
大型トラクターが砂けを
けて木を運び出している。
輸出先の九割(カオパマ)
は日本である。
こうした実状と、当人の
タスマニア行きがどう関係
しているのか。
雨林に住みながらアボリジ
ニは十九世紀末までの二
年弱の間に絶滅した。
白人たちの皆殺しに
からである。幸い、二世、
三世が残っていて、失われた
族の言語文化の再生に力
を注いでいる。経済自立の
道も探している。竹は自生
してはくとも、草むつろの
類はある。たつた。それら
ごとりとみえず、雑草も編
んでおぼろ。そががわす
ばかりの収入になつたりし
て...

石田吉明 写真展

石田さんが逝って二年近く
がたつ。著書「エイス」を
続けた巨匠であった。いま
天国から、横濱市の勤王
見守り続けていることだ
彼が生前に撮り続けた
と今秋、関西のミヤコ公
する。
1/4 5% フジフィルム
1/4 6% 大阪駅前丸ビル
1/4 7% 滋賀県彦根市
1/4 8% 大津生花堂
1/4 9% 大津生花堂

「転用の博物館」展

名古屋を中心にちぎす
「拾いのフロ」たちの展
日常の中にも、転用
物の展示がある。
主な出品：変容する道
たしー車止め、看板、漂着

縮小のなかの書齋

十九月末刊行予定ー注文受付中
縮小のなかの書齋
鳥社刊
送料共計 二八〇〇円

短信

〇 工部から 国 9/14 9/33
〇 三〇代の作りて 一人が一堂
に会す 大イイベント
会場はコルトニール(市)
〇 四七三二一七〇ー三三
〇 ガラス、紙、漆、陶、茶、猫、人形
〇 鍛鉄、鍛銅、さび、手
〇 かが作り、刺繍
〇 原宿から「だふれ」と
〇 縮小のなかの書齋
が、ラリーー

